The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ウィリアム・モリスのテムズ紀行 ： 源流を求めつづけた生涯
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	ＦＲＯＮＴ. 2003, 183, p. 6-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26628
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集 ウィリアム・モリス

ウィリアム・モリスのテムズ紀行

源流を求め続けた生涯

藤田治彦

大西洋に向かって大きく口を開けたブリストル湾に近いコッツウォルズ地方に発し、西から東へとイングランド南部を、そして首都ロンドンを横断してドーヴァー海峡へと注ぐテムズ川。画家ターナーなど、この川を連想させるイギリス人は他にも何人かいるが、ウィリアム・モリスとテムズ川との関係には特別なものがある。

テムズを遡る少年

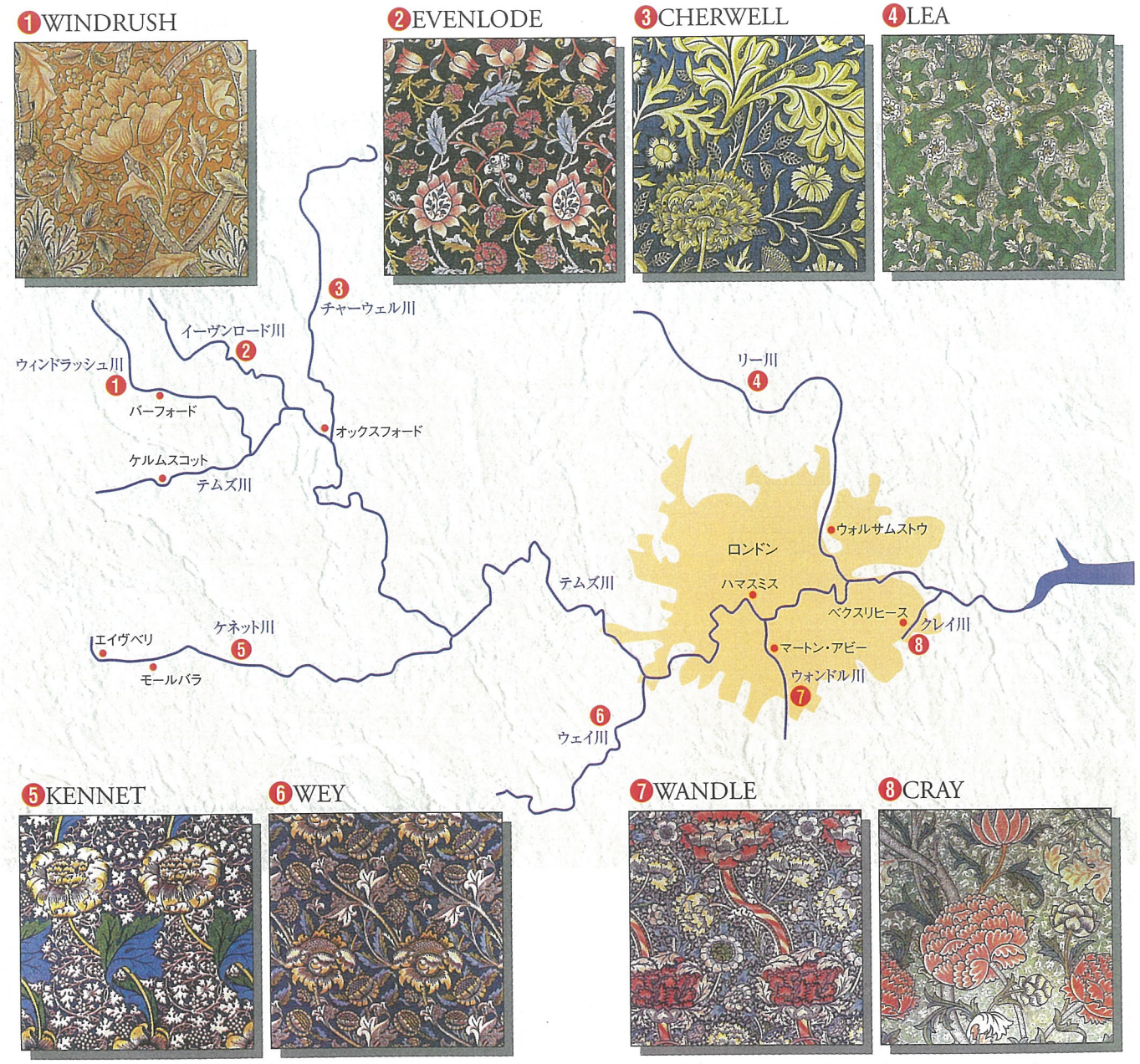
モリスはロンドンの北を流れテムズ川へと合流するリー川にほど近いウォルサムストウのエルム・ハウスに生まれた。一八三四年のことである。モリスが六歳になった年、一家はエピングの森を背にした壮大な館ウッドフォード・ホールに転居した。幼いモリスは兄弟姉妹と、のちにナショナル・トラストゆかりの地となるその森に遊び、ロウディング川で魚釣りをした。

自然に恵まれた環境での豊かな生活を可能にした株式仲買人の父が死去した次の年、一三歳になったモリスはロンドンのはるか西、テムズの支流の一つケネット川上流にあるモールバラのパブリック・スクールに進学した。さらに上流には先史時代の遺跡が散在するエイヴベリの村がある。現存する最初のモリスの書簡は姉のエマに宛てられたモールバラからの数通の手紙で、そこには環状列石その他の遺跡とともに、同地に氾濫原をなすケネット川の細流についての記述が見られる。モリスが残した最初の自然観察の記録でもある。

その間一家は再びウォルサムストウに戻って、大きな濠のあるひとまわり小さな住宅に引っ越し、パブリック・スクールから大学にかけての時期、モリスの帰省先はそのウォーター・ハウスとなった。現在のウィリアム・モリス・ギャラリーである。

モリスはテムズの本流を北に遡ったところにあるイギリス最古の大学、オックスフォード大学に進学した。同地ではイシス川とも呼ばれるテムズ川は、ウィンドラッシュ川、イーヴンロード川などのコッツウォルズの流れを集め、オックスフォードの南で大学町を北から流れてきたチャーウェル川を合わせて南へと方向を変え、エイヴベリからモールバラを経て流れてきたケネット川とレディング付

子供時代から青年期にかけてモリスが住んだ3つの家のうち、唯一現存するウォーター・ハウス（現ウィリアム・モリス・ギャラリー）。館の北にある濠では、ボート遊びや冬にはスケートを楽しむことができたという。



モリスゆかりのテムズ川流域と支流名がつけられたモリス商会のテキスタイル・デザイン。
モリスによってデザインされたプリント地は（CHERWELLは弟子ダールによるデザイン）、
おもにインディゴ抜染法を用いてマートン・アビーの工房で染められた。
（図版は、藤田治彦著『ウィリアム・モリスへの旅』淡交社刊をもとに作成。テキスタイルは『ウィリアム・モリスのテキスタイル』岩崎美術社刊より転載）

近で合流してロンドンへと向かう。これらテムズの支流の名は、一八八〇年代にモリス商会が製造した一連のコットン・プリントの名称となる。

しかし、この頃のモリスは自分が将来そのような仕事に携わるようになるとは思ってもいなかった。オックスフォード運動などの信仰復興運動の余波を受け、

モリスが遊んだエピングの森（右）はイギリス王室の狩猟林だったが、1882年に開放され、今もロンドン市民の憩いの場。この森に「エリザベス女王の狩猟小屋」と呼ばれる16世紀の建物（左）があり、少年モリスは、室内の壁を飾っていた色褪せた緑のタペストリーに心惹かれたという。

聖職者を志してオックスフォード大学のエクセター・カレッジに入学したのだが、それは当時、珍しい選択ではなかった。イギリス国教会の聖職に就くことは、中産階級の子弟とそれ以上に親にとって、安定した収入と社会的地位が保証される最も望ましい就職だったのである。

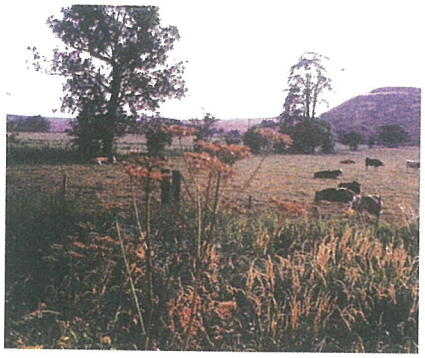
モリスが寄宿舎生活を送ったモールバラ校。

建築から絵画を経て装飾芸術へ

しかし、大学生活は若者の将来を変える。モリスは宗教から芸術へと転じた。中世への憧れに変わりはないが、いわばキリスト教信仰復興よりもゴシック復興運動により大きく動かされ、卒業を前にして、当時オックスフォードに事務所を構えていたゴシック・リヴァイヴァルの建築家G・E・ストリートのもとで徒弟修業を始めた。が、建築製図が苦手な自分に気づき、大学入学以来の親友エドワード・バーン＝ジョーンズとともに、ラファエル前派の画家ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティのもと、ロンドンで絵画を学び始める。

モリスがその画家への道をも断念したのは、ロセッティがモリスを含む数名の若者たちとともに手掛けたオックスフォード学生会館討論室の周壁画制作の前後であっただろう。モリスはロセッティがオックスフォードの劇場で見初め、モデルとしてグループに引き入れた女性ジェイン・バーデンに恋して求婚するが、彼女をモデルにした習作の裏側に「私はあなたを描けない。でも、愛している」と書いたと伝えられる。

人物画が苦手なモリスは当時の芸術観からすれば「画家失格」であった。しかし、その周壁画制作はモリスにとってもう一つの造形芸術の才能を確認する機会にもなった。アーサー王伝説の一場面を引き受けたモリスは、主体となるべき人物を隠すかのように一群の大きな向日葵（ひまわり）の花で画面を覆い尽くしてその絵を早々と切り上げ、その周壁画上の天井一面に見事な装飾を施したとされる。


ケネット川沿いにあるシルベリ・ヒルは先史時代の構築物（右手の丘）。パブリック・スクール時代のモリスは、このような古代の遺跡に興味を抱いた。

モリスが学友たちと平底舟で川遊びをしたオックスフォードのチャーウェル川。

モリスの新婚の家は、生地ウォルサムストウとはテムズ川をはさんで反対側、テムズ右岸のベクスリヒースに建てられた「レッド・ハウス」である。設計者はもう一人の親友、建築家フィリップ・ウェッブで、内装はおもにモリス、ロセッティ、バーン＝ジョーンズなどの画家と画家志望仲間が協力しておこなった。この共同制作が一八六一年に創設される室内装飾設計施工会社モリス・マーシャル・フォークナー商会、のちのモリス商会の基礎となる。

人物画は苦手だが、植物画はお手のものだった。《格子垣》《雛菊（ひなぎく）》《石榴（ざくろ）（果実）》といった商会の壁紙は好評を博し、ステインド・グラスの設置を含む総合的なインテリアの設計施工もおこなうようになる。そこで重要な役割を果たしたのは二人の親友、人物画が得意で画家となったバーン＝ジョーンズや動物好きの建築家ウェッブだったが、彼らが中心的な人物像やそれに伴う鳥獣などを描いた画面を有機的に統一しているのはモリスが描いた植物である。モリスはいわば「図」に対する「地」を描く装飾芸術家となったのである。

赤煉瓦と同系色の屋根瓦を使ったレッド・ハウス。このモリス夫妻の新居には、週末になると芸術家仲間が集った。

苦悩の地上楽園

モリスを一躍有名にしたのは一八六八年から七〇年にかけて出版した長編物語詩『地上楽園』である。ノルウェーの騎士や船乗りたちが「地上楽園」を求めて旅に出る話で、半数はギリシアの物語から、残りの半数はおもに北欧と西欧の物

語から取られ、南北ヨーロッパが対照され織り交ぜられるモリスの世界観を如実に示す構成となっている。この長編詩によってモリスは生涯『地上楽園』の著者として記憶され、それは日本でも同様であった。その後、日本では社会主義者としても知られるようになり、「近代デザインの先駆者、ウィリアム・モリス」というイメージが定着するのは戦後のことである。

一八七〇年前後は苦悩の時期でもあった。妻ジェインとロセッティとの関係が親密さを増したのである。道徳や体面を重んじたこの時代、モリスのみならず二人の愛人もともに悩み、ジェインは常に体の不調を訴え、ロセッティは阿片チンキの常用などのため健康を害していた。モリスはロセッティの健康回復のためテムズの源流に近い村に共同で別荘を借りた。モリス自身が気に入ったケルムスコット・マナーである。じつに奇妙な行為だが、ロセッティは絵画を学んだ師であり、ジェインがロセッティに心惹かれていることを感じながら求婚したという負い目がモリスにはあったかもしれない。

この時期、モリスは多忙であるにもかかわらず驚くべき量のカリグラフィーをこなし、古典や自作の詩に彩飾を施した手稿本を多数制作している。詩人モリスにとって図像だけのデザインでは不十分で、言葉を伴う彩飾手稿本の仕事一つ一つに自分をぶつける必要があったように思う。

モリスは一八七一年の夏、ロセッティがいるケルムスコット・マナーに妻ジェインと二人の娘を残してアイスランドに向かい、仔馬の背に揺られて一カ月以上に及ぶ荒野の旅をした。ギリシア・ローマ文化という「図」に表面を厚く覆われたヨーロッパの「地」を求めてのアイスランド中世文学サガの旅は、複雑さを極める三角関係からの自虐的な逃避行でもあった。この不幸な関係は、廃人同様になっていたロセッティが一八八二年に死去して終わる。

ロンドンのクイーン・スクエア。この界隈にモリス・マーシャル・フォークナー商会の工房やショールームがあった。

ロセッティと共同名義で借りた別荘ケルムスコット・マナー。1570年前後に建てられたこの地方独特の石造建築で（右側部分はその約100年後に増築）、モリスが最も愛した家。

ウェッブ設計によるケルムスコットのメモリアル・コティジズ（1902年建造）の壁面に彫られた「田園にくつろぐモリス」。このレリーフもウェッブのスケッチに基づいている。

社会主義活動から再び源流へ

モリスは事実上彼の会社であったモリス・マーシャル・フォークナー商会を一八七五年にモリス商会と改め、一八八一年には、それまでのロンドン市内の工房よりははるかに大きな工房をテムズ川の南、ウィンブルドンにも近いマートン・アビーに開設して事業を拡充した。テムズの支流の名を付けた一連のコットン・プリントを染めたのはマートン・アビーを流れるウォンドル川の軟水であった。それらすべてには、水面に浮かび流れる、あるいは透き通った川の底にゆらゆらと揺れる水草を想わせるデザイン上の共通性がある。

一八七〇年代後半から活動を社会へと向ける。モリスはイギリス政府の非人道的外交政策に反対して一八七六年に東方問題協会に参加、翌一八七七年には修復という美名の下におこなわれている歴史の破壊や捏造に対抗するために自ら古建築物保護協会を創設する。このような積極的活動は、バイロン以来のイギリスの行動するロマン派詩人の伝統上で捉えることもできよう。芸術と社会に関する講演は年を追って増え、一八八三年からは本格的に社会主義活動に参加する。

しかし、モリスは労働組合や社会主義政党の結成をめざすような職業的社会主義者ではなかった。そのため大いに貢献していた社会民主連盟を脱退して自ら社会主義同盟を結成する。が、新組織には

マートン・アビーのウォンドル川。水辺の風景は、モリスのコットン・プリントのデザインを彷彿させる。右手に水車小屋がある。

今度は無政府主義者が台頭して再度脱退、ハマスミス社会主義協会というローカルな組織をつくる。社会主義同盟の機関誌に空想小説『ユートピアだより』を連載し、自宅近くのハマスミス橋のたもとで野外講演を重ねるようになったのはこの頃である。

モリス自身と思しき『ユートピアだより』の主人公は、同盟の会合で「革命のあかつき」に社会はどうなるのかという激しい議論をして夜遅く帰宅し眠りについた翌朝、自宅前を流れるテムズ川でひと泳ぎする。しかし顔を水面に出すと、あたりの様子が昨日までと違っていた。嫌悪していた数年前に架けられた装飾過剰の鉄製吊り橋ハマスミス橋が消え、フィレンツェのポンテ・ヴェッキョをも凌ぐほどに美しい石造のアーチ橋が架かっている。「開通したのは二〇〇三年のことです。以前はかなり簡素な木の橋が架かっていました」。未来世界の若者はウィリアム・ザ・ゲストと呼ばれるようになるたぶん二二世紀に迷い込んだ主人公にそう語った。彼は自宅のあった場所に建つ館に案内され、そこで次のような銘板を見た。「客人ならびに隣人諸君。このゲスト・ホールの位置にかつてハマスミス社会主義協会の講堂建てり。その思い出のために乾杯。一九六二年五月」。

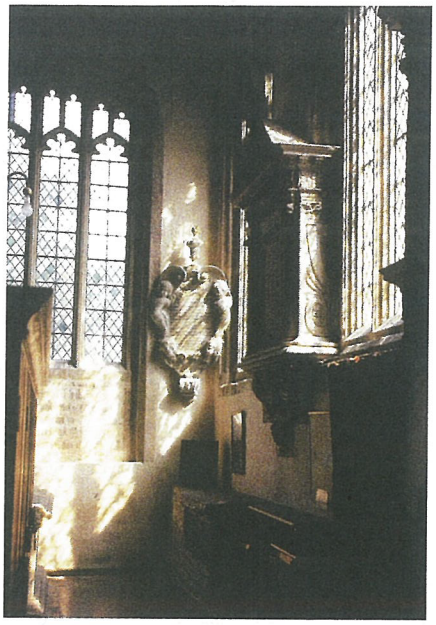
協会の本拠でもあった自宅は現存する。それは理想の住まいケルムスコット・マナーに因みケルムスコット・ハウスと命名されたモリスのハマスミスの家で、周囲には一八九一年に創設されたモリスの印刷工房、ケルムスコット・プレスの建物も残る。ケルムスコット・ハウスの地下には現在ウィリアム・モリス協会の事務局があり、その窓の外側には実際にその銘板が掲げられている。

何と素晴らしい趣向だろう。それを掲げたモリス協会の人々の機知も嬉しいが、やはり、自宅があるはずの場所に建つ館を訪ね、このような銘文を見て衝撃を受けるという著者モリスの構想の勝利であり、それを見る私たちも『ユートピアだより』の世界に入り込むのである。大きな違いは、ウィリアム・ザ・ゲストが迷い込んだ二二世紀のロンドンでは多くの問題が解決されているのに対し、私たちの世界は、二一世紀に入ったにもかかわらず、前世紀や前々世紀のままだということである。

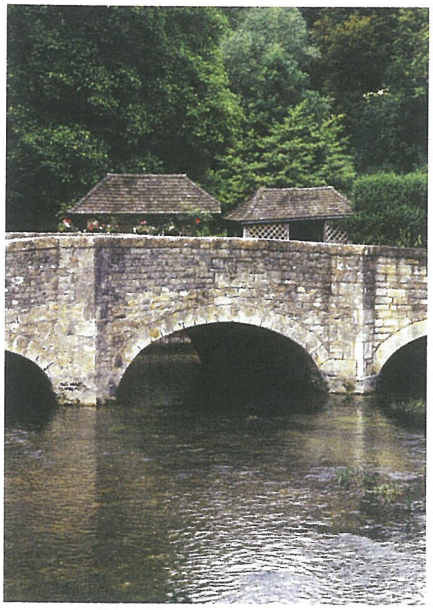
モリスは一八九六年の一〇月三日にハマスミスの自宅で死去した。死因について医者は、「病名ウィリアム・モリス、少なくとも一人で十人分以上の仕事をしたため」と答えたという。遺体は数日後にケルムスコットの墓地に埋葬され、モリスの最初の家を設計したウェッブが、最後の家である墓石をもデザインした。

(写真も筆者。ただし＊印は株式会社モリサワ提供)

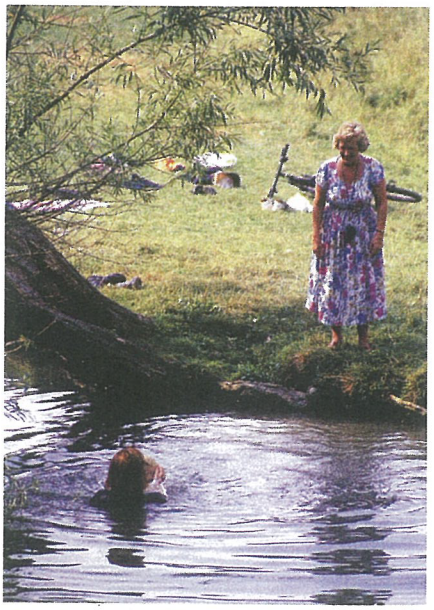
ロンドン市内、テムズ川沿いのハマスミスにあるケルムスコット・ハウス。この川の上流にある理想の村ケルムスコットの名を冠したモリス晩年の住まい。



バーフォードのセント・ジョン・バプティスト聖堂では、修復に際して聖人を描いた壁画が削り取られた。モリスはこのような無思慮な修復に異を唱え、古建築物保護協会を創設した。



モリスは自然と人の営みが調和した風景を愛した。テムズ上流のバイブリー。



バーフォードを流れるテムズの支流ウィンドラッシュ川。愛犬と戯れる少年と母親。

ふじた・はるひこ
一九五一年福島県生まれ。大阪大学大学院文学研究科教授。専攻は環境芸術学・デザイン史論。絵画、工芸、建築、造園と広い視野をもつ。著書に『ウィリアム・モリスへの旅』『ナショナル・トラストの国』(淡交社)『現代デザイン論』(昭和堂)、訳書に『ウィリアム・モリスのテキスタイル』(岩崎美術社)ほか多数。

ウィリアム・モリス年譜 William Morris Chronicle

（編集協力＝藤田治彦、構成＝編集部）

年代	年齢	モリスに関するできごと	年代	世界のできごと／社会状況など
1834	0	3月24日、ロンドン郊外ウォルサムストウに生まれる。同名の父はシティのビジネスマン		
1840	6	ウッドフォードの館に一家転居。エピングの森を遊び場とする	1837	ヴィクトリア女王即位
1843	9	ウッドフォードのプレパラトリ・スクールに学ぶ	1840	イギリス・中国（清）間のアヘン戦争（～42）
1847	13	父ウィリアム50歳で病死	1842	南京条約（イギリスに香港割譲）
1848	14	1843年創設のパブリック・スクール、モールバラ校に入学。ウォルサムストウのウォーター・ハウスに一家転居	1848	ラファエル前派結成。フランス二月革命。マルクス+エンゲルス『共産党宣言』
1851	17	11月、モールバラ校で学内騒動、年末モリスは自主退学	1851	第1回ロンドン万国博覧会
1852	18	聖職を志し、オックスフォード大学エクセター・カレッジ受験、合格	1853	ペリーが浦賀来航
1853	19	エクセター・カレッジ入学。バーン＝ジョーンズらと知り合う。ラスキンを愛読	1854	クリミア戦争（～56）
1854	20	次姉ヘンリエッタと初の大陸旅行、ベルギーのフランドル絵画、北フランスのゴシック大聖堂など歴訪	1856	清、アロー号事件（英仏連合軍による中国侵攻。～60）
1855	21	成人し、父の持ち株を相続。バーン＝ジョーンズらと北フランス再訪	1857	インド、セポイの乱。ボードレール『悪の華』
1856	22	建築家ストリートの事務所に弟子入りし、ウェッブに出会う。大学卒業。事務所移転に伴いロンドンへ移る。バーン＝ジョーンズと共同生活。ロセッティの影響で画家を志す	1858	インド、ムガール帝国滅亡、イギリスに併合。日英修好通商条約
1857	23	オックスフォード学生会館討論室の周壁画を共同制作。ジェイン・バーデンと交際	1859	ダーウィン『種の起原』。ミル『自由論』
1858	24	詩集『グウィネヴィアの抗弁』自費出版。ウェッブらと北フランス旅行。油彩画《麗しのイソウド》制作		
1859	25	ジェインと結婚。レッド・ハウス建設		
1860	26	レッド・ハウスに入居		
1861	27	1月、長女ジェイン・アリス（ジェニー）誕生。4月、モリス・マーシャル・フォークナー商会創設。レッド・ライオン・スクエアに工房開設。ステインド・グラス、タイル、刺繍、家具など制作開始。物語詩『地上楽園』執筆開始	1861	アメリカ、南北戦争（～65）
1862	28	3月、次女メアリー（メイ）誕生。商会はロンドン万国博で賞獲得。壁紙《格子垣》をデザイン（1864年登録）	1862	第2回ロンドン万国博覧会
1863	29	ステインド・グラス部門が順調に成長、注文増える	1863	ロンドン地下鉄開通
1864	30	レッド・ハウス増築計画と工房移転計画。長距離通勤などがたたりリューマチを患う	1864	第1インターナショナル結成
1865	31	夏にクイーン・スクエアに商会移転。11月、レッド・ハウスを離れ、商会の上階に転居		
1866	32	6月、モリス夫妻、ウェッブらと北フランス旅行。9月、セント・ジェイムズ宮殿の「武具の間」などの内装着手。10月までにサウス・ケンジントン博物館（現ヴィクトリア＆アルバート美術館）の「グリーン・ダイニングルーム」の内装着手。染色の試み開始、1830年代の版木で刷られたプリントを商品化		
1867	33	物語詩『イアソンの生と死』を自費出版	1867	マルクス『資本論』。大政奉還
1868	34	物語詩『地上楽園』第1巻出版。8月、アイスランド・サガを読み、翻訳着手。染《ジャスミンの格子》	1868	明治維新
1869	35	夏、ジェインの療養のためドイツ滞在。手稿本制作。『地上楽園』第2巻		
1870	36	彩飾手稿本『エイルの住人の物語』『詩の本』など。『地上楽園』第3巻。タイル《チューリップと格子垣》		
1871	37	6月、ケルムスコット・マナーをロセッティと共同賃借。夏に第1回アイスランド旅行		
1872	38	6月、ロセッティ自殺未遂。壁紙《飛燕草》《ジャスミン》		
1873	39	1月、ターナム・グリーンへ転居。4月、バーン＝ジョーンズとイタリア旅行。夏に第2回アイスランド旅行。物語詩『恋だにあらば』。染《チューリップと柳》		
1874	40	ロセッティがケルムスコット・マナー共同借地権放棄。夏に家族でフランドル旅行。壁紙《アカンサス》ほか		
1875	41	3月、商会を単独経営のモリス商会に改組。4月、フォークナーとウェイルズ旅行。カーペットのデザイン開始。染色実験に熱中。染《チューリップ》ほか	1875	リバティー商会創設
1876	42	12月、東方問題協会創設に参加。リューマチに苦しむ。染《忍冬》ほか、織・壁紙も多数		
1877	43	オックスフォード大学詩学教授就任を打診されるが辞退。3月、SPAB（古建築物保護協会）創設。オックスフォード・ストリートに商会ショールーム開設。12月、初の公開講演「装飾芸術」。染《柘榴》ほか	1877	ヴィクトリア女王インド皇帝となる
1878	44	4月、一家でイタリア旅行、痛風に苦しむ。6月、SPAB第1回年次総会。ケルムスコット・ハウスへ転居		
1879	45	夏に全国自由同盟創設に参加。講演「民衆の芸術」。織《小鳥と葡萄》ほか、壁紙も多数		
1880	46	5月、ヴェネツィアのサン・マルコ聖堂保存のため国際委員会創設を提案。8月、家族らとテムズ川を小舟で遡る	1881	民主連盟成立
1881	47	8月、2度目のテムズ川の旅。マートン・アビー工房開設。講演「芸術と大地の美」ほか。染《兄弟うさぎ》ほか	1882	センチュリー・ギルド創設。ヴィクトリア女王、エピングの森を国民に開放
1882	48	講演集『芸術の希望と不安』。講演「生活の小芸術」。ロセッティ死去		
1883	49	民主連盟（翌年SDF社会民主連盟に改称）加入。染《いちご泥棒》ほか、カーペット・壁紙も多数	1886	2月、トラファルガー広場での失業者大集会後のロンドン混乱（暗い月曜日）。イギリス、ビルマを併合
1884	50	社会民主連盟機関誌『ジャスティス』創刊。年末に連盟脱退、社会主義同盟創設。アート・ワーカーズ・ギルド創設。講演「有用な仕事と無用な労苦」「ゴシック・リヴァイヴァル」。染《ウォンドル》《クレイ》ほか、織も多数		
1885	51	社会主義同盟機関誌『コモンウィール』創刊。言論の自由擁護集会（ドッド・ストリート）翌日の裁判で騒動、モリスも一時拘禁。染《メドウェイ》ほか	1887	11月、トラファルガー広場大集会を警察弾圧、死者2名、負傷者多数（血の日曜日）
1886	52	「ジョン・ボールの夢」を『コモンウィール』に連載開始	1888	手工作ギルド設立。アーツ・アンド・クラフツ展協会第1回展
1887	53	タペストリー《森》ほか。壁紙《柳の枝》ほか		
1888	54	講演集『変革のきざし』。この頃、講演・演説は年間100回近くに及ぶ。第1回アーツ・アンド・クラフツ展	1889	第2インターナショナル結成。大日本帝国憲法発布
1889	55	講演「ゴシック建築」「染めの芸術」など		
1890	56	「ユートピアだより」を『コモンウィール』に連載。社会主義同盟脱退、ハマスミス社会主義協会結成		
1891	57	ケルムスコット・プレス設立。娘ジェニーを伴い北フランス旅行。ケルムスコット刊本『輝く平原の物語』ほか（以下記載の出版物はすべてケルムスコット刊本）		
1892	58	アーサー王物語《聖杯の探求》のタペストリーに着手。『ゴシックの本質』ほか		
1893	59	「イングランド社会主義者共同宣言」を共同起草。講演「理想の書物」ほか。『ユートピアだより』ほか多数	1893	ビアズリー『アーサー王の死』
1894	60	『ジョン・キーツ詩集』ほか多数。母エマ90歳で死去	1894	日清戦争（～95）
1895	61	フランス小旅行。タペストリー《聖杯の探求》完成。『ベーオウルフ物語』ほか多数	1895	ナショナル・トラスト設立
1896	62	1月、SPAB、社会民主連盟などの会合出席（最後のスピーチとなる）。『サンダリング・フラッド』執筆。夏にノルウェーで転地療養。『ジェフリー・チョーサー著作集』ほか多数。10月3日、ハマスミスの自宅で死去。同月6日、ケルムスコットの墓地に埋葬		